

円応教

平成三年度・新宗教研究調査の一環として、霊能中心の教団であり、関西から西日本を中心に教線を伸ばす「円応教」を訪問調査した。同教団は兵庫県氷上郡に聖地でもある本部を構え、大阪より福知山線の特急で約一時間、丹波から播州へ出る谷合いの地、谷川駅から車で五分の所にある。ここは篠山川と佐治川の合流点で、やがてこれは瀬戸内海に注ぐ加古川本流となっていく、まさに山狭の村である。小高い山が連なる内の一つの中腹に、本殿や諸施設が広々と立ち並び、周囲は季節柄、青葉が繁り、八重桜におおわれた閑静な大自然の中に溶け込んでいた。

訪問スタッフは四月二十六日に本部を訪ね、教務部長であり青年会会長の藤井庸佐氏と、教団の人権擁護推進委員会主任を務め教主深田家の菩提寺でもある、臨濟宗妙心寺派霊雲寺林学道住職から話を伺い、質問にも答えて頂いた。

*調査日時 平成三年四月二十六日

*場所 兵庫県氷上郡山南町村森 円応教本部

一、沿革

1 創立者

円応教では初代を「教祖」と呼称し、二代目以下を「教主」と呼んでいる。法人名の円応教が発足したのは二代目からなので、この項では両者に触れることとする。

教祖・深田千代子（本名いち。明治二十年（一八八七）十月三日（大正十四年（一九二五）一月六日）は兵庫県氷上郡小川村（現在の山南町）井原に、深田難吉とかるとの間の、三人兄弟の長女として生まれる。父難吉は当地でさやかな飲食店や駄菓子屋を営み、篤信の人であったという。千代子は幼い頃から子守り奉公などをして家計を助け

ていたが、十三歳の時に母を亡くし、母がわりに二人の弟の世話をしなければならなかった。縁あって二十一歳で笹倉三治と結婚、翌明治四十一年三月、男子を出産し、これが後に教団を組織する初代教主・深田長治である。しかし生後一カ月もたたない内に、三治は仕事の出先で毒殺されてしまう。

千代子は数年後、再婚。家計のやり繰りをしながら苦勞を続けていたが、大正七年の頃、大阪日本橋の聖大さんへ月参りをするようになる。しかし信仰についてはその程度で、特に信心深かったわけではない。その翌大正八年、三十三歳の四月頃から、先のことに對しある予感がし、不思議とそれが当たるようになった。一種の靈感のようなものが感じられたのであろう。そして同年七月十六日、さえわたる月に向かつて思わず合掌すると、発作のように急に神がかりの状態が起き、「世の中の道具」になれとの天啓を享けたという。修行の結果とか、病氣をしていた訳でも、神が憑いたのでもなく、突然のことだった。^註天啓の言葉は次のようなものであった。「この女 生まれつきよりそなわり 四十になれば 神の使いしめに生まれ 世の中の道具になる生まれであるが 余り世の中が進み 七年早く行人となり 世の道具になるか 靈たまで働かすか 姿で働かすか」。以来、緊張状態が続いてますます靈感が研ぎすまされ、「よくあたる不思議な神さま」として、人々が様々な判断を求めて訪れるようになる。彼女は善悪の道の研究と修行に徹し、その中から円応教の教え、後述する「修法しゅうぽう」が生まれてきた。

手を当てての病氣直しや、商売上の予言などを通じて信者が集まり、やがて弟子も持つようになって、教団の萌芽が形成されていく。指導の方法は行中心であった。例えば人が見ていない時に、「人が一番嫌がる便所を掃除しろ」という具合である。そして、たえ間ない緊張と人助けの五年七カ月が過ぎる中で、大正十四年一月六日、三十九歳の若さをもって永眠し、遺言通り桜の木の下に埋葬された。この頃の教団名は、「深田教」といっていたようである。没後、弟子たちによって円応法修会が設立されたり、円応修法会に名称が改められる等の変遷を経て、円応教が設立され初代管長、教主に就任したのが遺児の深田長治（明治四十一—一九〇八）〈昭和五十一—一九七六〉である。

刻苦勉励のすえ独学で小学校教員となり、それから青年学校教員、召集入隊、中学校奉職などを経て、そのかたわら会の手伝いをしていたが、昭和二十三年、宗教法人円応教が設立されると同時に管長、教主の地位に就く。以来、教団づくりに専念し機構整備や、教義概要の編纂、全国布教など隆昌発展に生涯を尽くした。昭和二十七年七月十日、宗教法人。本会代表を教主という。

註 但し、この霊能力に関しては、霊能力そのものが千代子自身の病気であると受取り、どうすれば治るか原因をつきとめるために修行をしたとの説もある。

2 成立沿革の年譜

大正 八―一九一九年 千代子に神がかりの状態が起き、天啓を受けて霊能力を発現する。亡くなるまで靈感による人助けを通じて信者が集まり、教団の萌芽を形成。この間、菩提寺の臨濟宗妙心寺派・靈雲寺住職と手紙のやりとりがあり、同宗の教義も浸透していったと思われる。

大正 十四―一九二五〇年 大阪の行場で千代子死去。数え三十九歳。菩提寺から、「円応智覚大師」の法号を授与される。三十五日忌に石塔建立を契機とする会として円応法修会発足。一番弟子の横山仙太郎他七人でスタートした。

昭和 六―一九三一〇年 円応修法会に改名。靈雲寺の林誠道住職が会長に就任し、会堂を同寺前に建立。

昭和 八―一九三三〇年 内部分裂があり、伴中実義は別派の円応報恩会を結成。

昭和 十六―一九四一〇年 宗教団体法令の規制統合により解散。靈雲寺信徒として信仰活動を持続する。

昭和 二十三―一九四八〇年 宗教法人円応教を設立。深田長治が初代管長に就任。円応報恩会と合併。

昭和 二十六―一九五一〇年 本教庁を現在地に移転。新日本宗教団体連合会結成にともない、同時加盟。

昭和二十七〜二九五〇年 宗教法人認証。

昭和二十九〜二九五〇年 円応青年会結成。

昭和三十三年〜一九五八〇年 管長を教主に改称。

昭和三十五年（一九六〇）年 大阪朝日放送でラジオ放送開始。平成三年現在、北海道から沖縄までの十五局で放送され、全国各地をカバーしている。

3 教勢

関西から西日本を中心に広まり、『宗教年鑑』（平成二年版、文化庁編）に依れば信者四一七七一〇、教会二〇三（うち法人六八）、布教所二九八、教師は四一八七（うち女性三二八七）である。信者は女性が多く、教師の七六％が女性。

二、教義

1 おしえ

諸教。祭神からは神道、仏教の混合（神仏習合）型といえる。但し祭神は宗派を越えた、自分を生かしてくれる宇宙全てと位置付ける。臨済宗系とする見方もある。本教独自の修法を中心とするが、立教の本義、教えの根本は教祖が受けた天啓の通り、「世の中の道具」になることという。この道具とは人間としての道を現わすものととらえ、愛と誠をもって個人の霊能の發揮につとめ、社会のために働くことである。円応という教団名の「円」は真理を表し、「応」はそれに応じる、順応するの意味で、円の中心（大御親）から発展した永遠の命と、個々の命が通じ合う円融一如の生き方を表わすとするが、そのように天地同根、万教一元、物心一如を強調し、個人の霊力の無限制性、崇高性を説く。特に、「まこと」「誠」「愛」「善」「陰の行」の五つを強調する。この五つは教義の五項目と呼ばれ、教祖の筆

先から引き出された教えである。「まと」とは信仰の対象であり、多くの神仏、先祖を指す。ことに先祖を祀るのが教祖の出発点だったようである。「誠」とは信仰の眼目、心の持ち方で、真理とか悟り、道とも説いている。「愛」は自分と相手とが一心一体、異体同心となること。「善」は誠の道をふみ行うこと。「陰の行」とは、人の見ていない時の自身を慎み、陰徳を積む行いをする事、具体的には奉仕行である。これらは初代教主の制定した『信者訓戒』(八、信徒の義務参照)などによく示されている。

他宗の信仰や諸仏、諸神の信仰を幅広く許容、包含し、排他的な自己主張を抑制する志向性があり、新宗連の活動にも熱心に取り組んでいる。他宗容認と本教布教の矛盾点に関しては、万教一元、敬神崇祖を元とし、教義中心でなく行中心の教団なので矛盾を感じないということである。現に日蓮宗信徒や神主まで含めた掛け持ち信徒がおり、葬儀はそれぞれの菩提寺で行なわれているという。

2 教典

『円応教教典』『御教祖様御遺文集』『円応教日課勤行文』『教義概要』『自覚反省懺悔文』

3 機関紙誌

「円応新聞」(月刊 部数二万)、「円応」(月刊 部数一万二千)、「円応青年」(月刊 部数六千五百)。以上、円応社刊。

二、尊崇の対象(祭神)

大御親様(おおみおやさま)。信仰対象は自由であるとしているが天照皇大神、八百万神、釈迦、三世十方諸仏などの宇宙的生命と、先祖という血族的生命の全ての根源を大御親様と呼称し、円型の鏡で表徴する。教祖は神仏と名のつくもの、あらゆる人が崇め奉っているものに対し絶対の帰依をしたことから、信仰対象は自由としたが、初代教

主にいたって、鏡は眞を写し、円の意味もあるところから、鏡をもって表徴するようになった。

しかし実質的には教祖帰命が強いことを、教団職員も素直に認めている。教祖が先ず初めにあり、教義は後から人が作ったものだからである。その証拠に教団では信者に、聖地参拝の時は先ず大御親様を祀る本殿への御参りを説くが、どうしても教祖の墓所へ行ってしまいがちだという。

また教団施設以外の会場を使う時は、シンボルマークを掲げることもある。これは図のように円の中に桜の花が描かれ、中に「覚」の字があるマークで、円は円応の円、桜は音読み（おう）から、円応の応を表す。覚は教主の法号 智覚大師の覚のことである。桜は教祖が「桜の木の下に埋葬を」との遺言の因縁からきており、このマークは教団旗、バッジにも用いられている。その他、各家庭では院号が追贈された教祖の法号 慈照院円応智覚大師霊符と記された「まと霊符」というお札を仏壇か神棚、祭壇に祀っている。それぞれの礼拝方法は、二拝・合掌・一拝の順である。

シンボルマーク



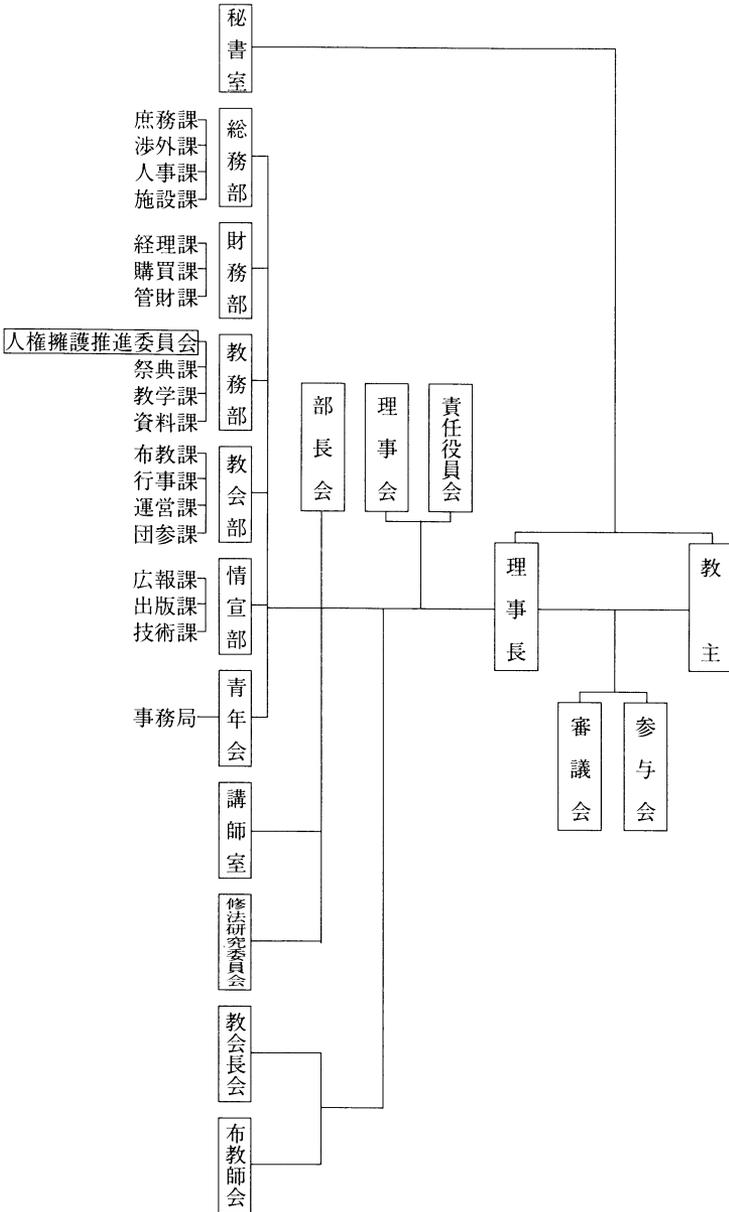
四、組織・機構並びに機能

1 本部・聖地

兵庫県水上郡山南町村森一一。本部はそのまま聖地であり、施設としては本殿、五法閣、教祖墓所、教主霊廟、慈照殿、青年道場、霊園事務所、誠山亭、お火たき所、大地の御親、修練所、レストランさくら、教職舎、研修会館、給食センター、お百度石などがある。本殿は一階に修法室が八十二室、二階には六千人収容の本殿礼拝室がある。祭壇部分に当る神殿を真殿と呼び、その中央に大御親、左に教祖、右に祖霊を祀っている。五法閣は九階建ての堂々と

したもので、一階には滝の見える広いラウンジ、二階以上には事務施設、研修室、宿泊室、大ホール、結婚式場や土産物店まで揃っている。慈照殿は教祖遺品の奉安所、信者の位牌安置所である。

2 本部組織



3 教会（支部）

約二〇三カ所あり、信者数は最低一〇〇世帯、多い所で二〇〇世帯ぐらい。七〇%が自宅を教会にした自家教会で、教会長と布教師とで運営されている。霊能者と信者のつながりが深いため、教会への帰属意識が本部へのそれよりも強く、霊能者の信者所有意識も見られるという。

五、財政

会費は本部付き教会で一人月二百円、一世帯では五百円。それ以外ではまちまちで、数万円の教会もあるらしい。入会金は一律二千円、その内五百円を各教会に還付し、霊符収入も各教会の運営費になっている。また「世の中の道具になれ」との基本教義から、皆のために役立つお金の使い方をしたいとの空気があり、献金や、大会等での奉納金も多いとのことである。その他、事業としては株式会社円応社、ドライブイン的なレストラン・さくらを経営している。

六、布教教化

全国的ラジオ放送や機関紙誌の発行、各教会での大会や運動会の開催、訪問布教等も行っているが、同教は霊能中心の宗教であり、なんといっても活動の中心は「修法（しゅうほう）」といわれる独特の儀礼。修法を行える布教師は霊能者の役割が大きく、未信者がまずクライアント（依頼者）として霊能者から修法を受けて、問題解決の糸口を暗示され、実行し、おかげを受ける。そしてまた問題が起こると修法を受けるようになり、それが繰り返されながら固定した信者になっていく。但し同教では修法を重要視するが、万能とはしておらず、自分が気付かない悪いところを「自覚し反省し懺悔する」のが目的で、精神修練の一方法と捕えている。故に、かえって修法中に発せられる教文

というリズムミカルな言葉についての修法後の解説、および面談を大事にしている。これは教文の内容を穏やかに、わかり易く語りかけながら、信者に心の持ち方を説き、抱えている問題の解決を目指すもので、しばしば厳しい行を課すことがある。しかし霊能者はむしろそれに同情し、励まし、時には共に行ずることさえあるという。このようにして両者には援助的関係ができていくようになり、信者の円応教受容が深化していくという。つまり霊能力とカウンセラーとしての資質が霊能者には求められ、それが布教化の成否を決定づけることになる。

修法が中心であるので、信者の霊能者に対する尊敬の念は篤く、両者のつながりは強い。また修法のふし、言葉、手振りなどは弟子系統で異なり、先輩霊能者の影響を受けていく。このことは信者の霊能者個人に対する崇拜や、霊能者の信者所有意識にもつながりかねず、教団本部にとっては危険性をはらむものでもある。これらに対しては修法万能視の否定と教義の重視と浸透、本部や教会などの円応施設以外での修法の禁止、本部参拝と奉仕の奨励、祭典礼法の整備、教団本部による布教師養成、本部直轄の教会設立等の方針でカバーしているという。

同教では布教師をシステム化して養成している。布教の武器ともいえる修法は布教師が行う秘儀とされているので、霊能者のほとんどは布教師だが、布教師でも教文が口から出てこない者、逆に布教師資格のない者でも教文の出る者もある。但し教文の出ない布教師であっても、体験談等の言説や人格で信者をりっぱに導いている教会長もいるとのことである。最高位の大司祭師以下、覚導師までの十一階級があり、布教師検定規程の定めにより養成される。入教二年以上在籍する満二十歳以上の信者で、教団史や教義などの教養講座を二回以上聴講するか、五人以上の入教紹介をした者には布教師養成講習（夏冬年二回、期間は十五日間）の受講資格ができ、受講中に試験検定を受ける。内容は学課と修法だが、修法ができなくても布教に熱意ある者は、修法を省くことができる。さらに本部清掃などの奉仕行も課せられている。なお、この講習は布教師養成であって、霊能者養成ではない。霊能を高める修行は個々人が自ら修行するものであるという。

平成二、三、四年度の布教スローガンは、「あなたの心のみ教えを」という信仰目標の徹底化があげられ、各教会では更に「一人が一人を増やそう」などの目標を立てている。

七、体験事例

1 まとうあたり

霊能者の自覚、反省、懺悔のための個人的修行方法である。自らの悪い行いが思い出されたり、気付いたりするとい、現在ではこれも修法と呼んでいる。信仰対象＝鏡の前で自分一人で礼拝し、教祖の霊の導きを信じ、霊の力の無限の働きを自覚し、心をこめて両手を合わせて念じていると、ひとりで両手があがり、動き出すに至る。手の動きは自然に出てくるもので、靈感は手の先から最初に表れるということだ。

2 修法

まとうあたりを布教師同士、または布教師と信者が向き合って拝み合う形である。こちらも教祖の霊導を信じながら、「我にて知らず知らずの悪き我のことお知らせ願います」等と念じながら、個人の霊力の無限性、崇高性、偉大性を自覚反省し、過去現在の行動と品性を懺悔し、また直観力と靈感力をも養い、これによって人格完成につとめ、個人と社会の幸福なる生活を打ち立てることを目的とする。拝みあっているうちに、霊能者の手先や身体が動き、教文といわれるリズムカルな御詠歌に似た調子の言葉が発せられる。さらに身体が揺れたり、両手で大きく円を描いたりするような動作がみられることもある。この身体的表現は、「霊」の表現であるといひ伝えられている。

教文は教祖の霊導を受けて、各霊能者から直観的に感じたまま出てくる独特のふし回しの七・五調の言葉だが、教祖が述べた言葉そのものというわけではない。伝わってないということである。意識されて条理整然と発せられるもの、意識されているが片言片句で発せられるもの、半意識の状態で発せられるもの、無意識に発せられるもの等が

あり、これらが入り混じる場合も見られる。例えば「川の流れば絶えず」という教文は、ものに執着してはいけない、と解釈されるなどといった具合に、信者や依頼者のもつ問題や、過去、現在、未来のことが暗示的・象徴的に指摘される。また信者が思っていることを引き出し、吐露もさせる。ただし各霊能者の洞察力によって、物の見方に浅深あるのはまぬがれない。

今回の訪問調査では、修法の実修を受けることも出来た。本殿一階には八十二もの修法室があり、通された一室は六畳ほどの個室。七十歳過ぎの白衣、袴をつけた気の優しいような霊能者が待っていてくれた。正座し、まず正面上に祀られた大御親様に向かって二礼、そして「大御親様、御教祖様どうぞお守り下さい」と二回念唱し、再び一礼。そして霊能者に相対すると、手振り、身振りと共に教文が発せられた。「しみじみつらつら、此の世に生まれきたる我が身を見るなれば、親のなさけの導きが」——神仏、親の恩、先祖への供養などが説かれ、静かな御詠歌の如くの調べが流れた。この後、人格完成、人間性を高める等の話を伺い、最後に二礼、「私のいたりませんこと、どうぞお守り下さい」との念唱、そして一礼。この間、霊能者は「大御親様、御教祖さまお願いします」と念唱している。個室の中で物静かな流れの教文を聞いていると、こちらの心も落ち付き、平静な気分になった。八十二もの修法室があり、一人ひとりに丁寧にかウンセリングするというのだから、確かに信者との精神的な結び付きは深くなるだろうと思われる。但し若い信者からは、暗示的に言うのではなく、はっきりと明確に言って欲しい、という声も最近はある。がっているそうである。

3 儀式行事

例月祭（二〇一二年十二月六日）、教祖祥月祭並墓前祭（一月六日）、春秋大祭（四、十月六日）、教祖様御誕生祭（十月三日）、立教記念祭（七月十六日）、大地の御親祭（六月二十六日）、円心青年会結成記念大会（十一月二十三日）。これらの行事では国家斉唱（強制ではない）、勤行、体験発表、御親教などがプログラムされている。

八、信徒の義務

陰の行、敬神崇祖、菩提寺や氏神の尊重を基本的義務として、生活規律に次の五つがある。

(1) 「信者訓戒」 ①人間性を重視し、人種男女の差別を廃し礼節を尚び、一視同人であること。②心を一つにして教祖の靈導により愛と誠をもって靈能の發揮につとめる。③いつも本元を考え、目的を立て、道をあやまらないように。④人格の完成につとめ、模範的進取的であろう。⑤心と身をもって社会教化のためにつくそう。⑥独断専行を慎しみ、衆議を重んじ、共に行じよう。⑦与えられるよりも、先ず施し与えよう。⑧過去を深く考え、現在をよく行い将来によりよく生きよう。⑨本教の生活化につとめる。先ず陰の行が第一である。⑩他宗教派を非難攻撃してはいけない。進んでその融和大同助長を図り、もって本教の目的に進もう。

(2) 「感謝文」 おそれおおくも、大御親の恩恵、円応智覚大師の靈導と、ありがたき先祖の守護により今もなお生かされていることを深く謹み畏み感謝し奉る。

(3) 「朝の誓」 ああ、うれしい。今日もまた、御親様のお導きにより、誠一途に働かしていただきますことを、お誓いいたします。

(4) 「夕の感謝」 ああ、ありがたし、今日もまた、御親様のお守りにより、元気で働かしていただきましたことを、感謝致します。

(5) 「青年自訓」 ①働きに耐えられる強い身体に鍛えよう。②万事万物の恩に感謝のできる心を養おう。③知識と技術を磨き、個性をよりよく伸ばそう。④規律を正し、秩序を守ろう。⑤枝葉末節に走らず、本質を生かそう。⑥強固な意思をもって、物事をなしとげよう。⑦目的を自覚し、全身全霊をうちこんで働こう。⑧謙虚な心で、どなたに限らず、人を敬愛しよう。⑨進んで、何からでも世の中に奉仕させてもらおう。⑩自律活動に努め、他人の良言をも

いれよう。

九、入信者の感想

信者から聞く機会はなかったが、応対して頂いた方からは次の二点の答えがあった。(1)何を拝んでよいか分からない。(2)神仏はものを言ってくれない。

(1)は全てを含んだ大御親をたてながら、信仰対象は自由としていることから、結局は何を対象にしたらよいのか不明、というのだろうか。信仰する心は、必然的に形を求めるのが一般的である。聖地参拝では先ず大御親を中心に祀る本殿を第一に勧めているが、信者はどうしても教祖墓所を初めに参拝しがちになってしまふのは、このような面も影響しているのだろう。

(2)に対して有効な解決方法となっているのが、修法である。教文は身近な問題への答を出してくれるからだ。また信者の話をじっくり聞いてあげるだけでも、問題によっては半分以上の解決になるだろう。本宗にてもカウンセリングの大事さを真剣に考えるべきだと思う。

一〇、日蓮宗との比較

(1)他宗容認志向が強い これは敬神崇祖を基本教義にしているからと思われる。日蓮宗の現状は実質的には他宗容認的であるが、基本教義は折伏である。

(2)実質的に教祖中心 大御親の語を創作し、鏡で表したのは初代教主であり、教祖は具体的には述べていない。教祖の霊導を信じて救いがある、と説くところからも、教祖中心というの否めない。

(3)修法後のカウンセリングを重視 既成教団への信徒の不満の大きな点に、「悩みを聞いてくれない」「将来の安心

より、今の安心が欲しい。それを示してくれない」というのがある。コミュニケーションの少ない時代であるからこそ、カウンセリングの重要さが浮び上がってくる。

(4)本部(聖地)中心主義を目指している 本部と教会との統制・被統制関係は伝統的にそれほど強くないが、前述のように本部中心に努力している。

(5)教えが一般的で理解し易く、生活規範となり易い 教義的用語一つをとっても、宗派としての強い個性を感じさせるものは少ない。一般的で、包括的宗教用語を思わせるものが多い。

参考文献

- (1) 松野純孝編『新宗教辞典』(東京堂出版 昭和五十九年) (2) 井上順孝他編『新宗教事典』(弘文堂 平成二年)
- (3) 『目で見る円応教』(円応教 昭和六十一年) (4) 深田長治著『教義概要』(円応社 昭和二十七年) (5) 田子佳代子著『霊導のままに』(円応社 昭和四十四年) (6) 深田長治著『御教祖様御遺文集 上中下』(円応社 昭和三十五年) (7) 清水雅人他著『民衆宗教の実像』(月刊ペン社 昭和四十七年)

※調査スタッフ 赤堀正明主任、木村康之所員、植田観樹・西片元證・渋沢光紀・山口裕光研究員

※執筆担当者 山口裕光研究員